

川及日野川三角洲上を踏査した際特に興味を以つて注意した若干の事實を列記し尙之に多少の私見を加へたのである。然しながら其の踏査たるや初めより餘暇を盗んでの副業的事業であつたので未だ決して充分の結果を得て居ない。今後尙踏査を續けるならば尙多くの興味ある新事實や前記の私見に補訂を餘義なくする事實が発見せられるに違ひない。余は其れを希望して止

若狹蘇洞門の奇勝と有用鑛物

石 川 成 章

まないものであるが一先づ備忘録整理のため又今後踏査の際に於ける参考のため茲に既踏査中見聞せる事實及び之れに對する私見を述べて見たのである。比較的誤謬少なく統一ある結論に至つては之れを後日に待たなければならぬ。(完)

(一九二六・九・一二)

海岸の斷崖に於て、岩石の節理の爲めに生じた奇勝に就ては、本邦太平洋岸よりも日本海岸に多くの期待を持つのは當然であつて就中著名なのは越前の東尋坊、筑前の芥屋大門（ヤオホト）、肥前七ツ釜等で、東尋坊は花崗岩、芥屋大門も七ツ釜も玄武岩の節理が呈する奇勝で、本誌にも既に記載せられた事があり、世人周知の筈であるが

若狹蘇洞門の奇勝と有用鑛物

若狹蘇洞門（ツトモ）の奇勝は、從來交通の不便であつた上に一年の大部分風浪が荒くして、之を觀賞する事の六ヶ敷爲めか餘り廣く知られて居無い様であるから、茲に之を江湖に紹介し様と思ふ。本年八月大阪毎日新聞は、數枚の寫眞を掲げて、蘇洞門の奇勝を宣傳したから、之を覽た讀者は、尙記憶に新たなるものがある筈である。

奇勝の所在は、福井縣遠敷郡内外海村に屬し若狹小濱から西北約二里、松ヶ崎の鼻から以東日本海に直面した斷崖で、小濱から發動船で約一時間を要する、一年の内で、風浪の靜かで、最も遊覽に便なのは、五月頃から八月中旬の間で、海水浴を兼ねての觀賞が最も適當である。發動船は小濱を發し、約東西に駢立せる二兒島の西を掠め、泊を経、松ヶ崎の鼻を廻り、小山に至りて愈々蘇洞門の奇勝に入るのであるが、此小山迄の地質は古生層で、硬砂岩、粘板岩、輝綠凝灰岩より成り、走向は概して東々北で、西北に斜下し、海岸の崖には、侵蝕の爲めに生じた狗ヶ洞、蝙蝠洞等の洞窟があり、海中には鎌岩、烏帽子岩等の奇形岩が兀立して居て、風景が既に平凡で無い、小山の東の懸崖下には、隠し水と稱して、清冽な淡水が滾々として海中に湧き出て居る處があり、漁夫などは之を汲んで飲料に供するといふ事である。

泊から此小山の突角迄は最近海岸道路が開鑿せられたから、風浪の烈しくて、舟航の危険な

節は、泊から小山まで陸路を取りて、勝景を觀賞する事が出来る、西方には瑠璃色の小濱灣を距て、大島の積翠と、松青砂白の砂洲が横はり宛然天の橋立を縮寫した觀があり、其西南には凸凹屈曲の頗る複雑な若狹沿岸の長汀曲浦が相



蘇洞門の景

參差して到底繪畫も及ばぬ眺望である。

小山の突角は、恰かも古生層と角閃花崗岩との境界に當り、是より東方の蘇洞門の絶勝は、全然角閃花崗岩で、久須夜ヶ岳東北角の俗稱黒岩、白岩まで續いて居る、其處がまた花崗岩と古生層との境で、花崗岩は白く、古生層は黝褐

色で、兩岩の境界は、懸崖に於て一見甚だ明瞭である、小山の突角の日本海に直面する絶壁に於ても、花崗岩と古生層との分界は判然として居るが、是處では花崗岩が、少くも三四條の支脈に分れて古生層中に侵入して居り、其末端が複雑な形を爲して居て、白岩、黒岩に於けるが如く、簡単な線を畫して居らぬ、蘇洞門の懸崖は、全部中粒質の角閃花崗岩で、有色礦物が割合に少ないから外觀白色で、古生層の崖よりは遙に奇麗である、加之古生層の崖は、幾分丸みがあつて突兀の態が遠く花崗岩に及ばず、花崗岩は質が堅硬で、垂直な柱狀節理と、是に直交斜交せる横の節理が顯著であるから、怒濤の爲めに之に沿ふて崩壊し、稜々として角張つた、幾十丈の物凄い絶壁や、海水の通する大小の洞門を形成し、或は海中に幾多の岩礁を林立せしめて、其上に松蘿が蹣跚し、深藍色の潭淵に臨んで居る卓拔秀麗の景趣は、實境に接して觀察する外、到底筆にも言語にも適當に之を表現し得無い。

先づ小山突角の基部には巨大な通洞がありて迂餘曲折小舟を入れるべく、少しく東すれば燭臺岩、機織岩を前にして、華洞門が開き、東北には蓬萊狀の唐船島を過ぎて、猛獸の蹲踞かと驚く獅子岩があり、飛魚越の狹峽を辛うじて通過すれば、岸に匍ひ上らんとせる夫婦龜岩を觀る



蘇洞門 大門 小門

眼前幾百尺の懸崖には、白糸の瀧が恰かも白布を垂れた様で、坦々たる百疊敷岩を繞れば、巍然海角に削立せる大門、小門が相并んで遊客を歡迎して居る、門を出れば右に吹雪ノ瀧、左に屏風岩が更に新興を添へ、千疊敷の臺地は、登

りて雄大なる日本海の景觀を肆にすべく、又神代の昔、彥火々出見尊が、龍宮から御歸還の節玉依姫の引出物たる満干潮の二寶珠を携へて、此處に上陸なさつたといふ、傳説を偲ぶに最も適して居る。

此附近は、獨り景觀の奇拔秀麗誇るに足るものがあるのみならず、山には山葵^{ワサビ}、自然薯の美味があり、又金生麗水の謠に漏れず、金、銀、銅、重石、水鉛の原鑛が產出した。

小山突角の古生層と花崗岩との接觸部に舊坑があつて、坑内に炭酸銅や酸化銅が尙處々に見受けらるゝ、是は明治十八年頃から廿七年頃まで、泊銀山と稱して金、銀、銅、鉛鑛を稼行したもので、『燒け』が嶮峻な懸崖に望みせられ、三條の鑛脈が、五間乃至六十間を距て、北七十七度西に駢走し、幅二乃至四尺で、殆んど直立し其中一條は硬い母岩に介在し、主に銅鑛脈であるが、他の二條は、粘土脈中に含銀方鉛鑛を胚胎せるもので、粘土と鑛石との割合は約七と三で、上鑛は殆んど四割六分の鉛を含み、其中に

約千分八の銀を有する良鑛であつたと報告せられて居る（二十萬分一宮津圖幅地質説明書に依る）、明治廿七年巨智部博士踏査の際は、舊式ながら小規模の製煉をも實施して居つた様であるが其後幾何も無く休山して、其後再興せられ無いのは、脈が斷絶した爲めであらうか。

又小山の南、『隠し水』の西北には、花崗岩中に塊狀の飴色灰重石と、四纏大の巨大なる硫水鉛鑛片を含む鑛脈が在つて、本年新道開鑿の際崖の岩石を爆破した時、相當の分量が出て來たが、工夫が之を知らずに、新道の下に埋めて了つた様子で、更に其處を掘り返さねば、鑛石も得られず、產出の狀況をも檢する事が出來ぬのは遺憾である、地形は頗る急峻であるが、掘採は容易で、船積みには至て便利な處であるから將來稼行せらるゝ時機もあるであらう。